

---

## 置き場所。

ツキミキワミ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
置き場所。

【Nコード】  
N5225Y

【作者名】  
ツキミキワミ

【あらすじ】  
てんろぼの改稿にあたり、倉庫設立。

## 万能コード

少年の立っていた床のデータを取得しながら、フランススが頭を指差して言った。

「あの少年は馬鹿ですね。  
感情を構築するのは胸などではなく、こっちです。胸にあるのは心臓です。」

雪洞はそんなフランススを見て

見た目はどうであれ、やはりこれは機械なのだと、悲しそうにふっと笑った。

「にしても、黒幕はがただ者じゃないことは間違いないわね」

気付かれぬように深くため息をついて、雪洞は言った。  
いつもの顔に、戻らなければ。

「そうですね。」

これまでも襲撃されることはよくありましたが、いつも単純直接的な接触によるものでありました。

此処まで手の込んだことを行うにはそれなりに技術が要りますからね。

また、彼の依頼主は複数である点も特出しています。」

「目的は何なのかしら」

フランスはタブレットを触りデータが残っていないか確認していた。

「セキュリティシステム人間の力でどうにかなるものではありません。」

やはり、何らかの人工知能による接触が考えられましょう。」

タブレットは屋敷の写真以外に何かのデータを保持しているようだった。

フランスはデータを開示しようと試みるが、何をやっても

「ピピピ」

と侵入を拒否される。

「お嬢様、何かがあるようなのですが復元ができません」

「ああもう、貸して！」

「これで…こうして…」

雪洞は自分がこれまで得た知識を総動員してデータの復元を試みていた。

「 $dV/dt = I_m \cdot (V_a + V_b) \cdot g_N a \dots x \dots$   
「 $(t, x) = A \cos(t \dots$   
ここに電子を…ああダメ、かあ」

数字の渦の中だけは全てを忘れられる。

沈み込んだ自分を引き上げるように、雪洞は分析に没頭した。

しかし、何をやってもダメであった。

仕方ないわね、あれを使いましょう

ここで引き下がることはできなかった。

何がなんでも、あの少年にもう一度会わなくてはならない。

雪洞は、フランススの『キヲク』にも入れていない禁断のコードを用いることを決めた。

これを使うのはいつぶりかしら。

そのコードとは、彼女が学生時代に発明したオリジナルの万能解読コードである。

それは実に巧妙にDNA鎖を解くヘリカーゼのように、どんなものでも解除してしまう。

とても便利な反面、いらぬことまで明らかにしてしまう大変厄介な代物だった。

彼女がまだ学生だった頃、嚴重に固められたセキュリティを破ることが彼女の日課だった。

最初のうちそれは、一少女の純粋な楽しみにすぎなかった。

次第にハッカーとして名を馳せていた彼女は、ある日政府の管理す

る建物の地下に呼ばれた。

御遊びが過ぎると罰を受けるのだろう、と身を縮こまらせていた彼女に、国の最高意思決定者は言った。

「君の実力をかっている。雪洞・F・ケイマ、敵国の機密文章を手してほしい」

「敵国の…」

当時は丁度、20世紀で言うところの冷戦のような武力行使のに水面下であらゆる産物を楯に勃発する戦争が相次いでいる時だった。

「私に戦争に加担しろと」

もちろん断る

そう言いたかった。

しかし、当時の彼女にはまだ大切な人々がいた。

断れば、彼らに火の粉が降りかかることは自明である。

雪洞は黙ってうなずくしかなかった。

「とはいえ、国レベルのハッカーって一度やってみたかっただのよね」

まだいたいけな少女の好奇心は、わずか半年たらずで敵国のデータバンクへの侵入を達成させてしまった。

表沙汰にはならなかったものの、彼女は世界中で一躍有名になったのである。

そんなある時、コードが主人の意思に反して暴走し、いらぬ自国の機密事項まで入手してしまった。

「やっぱりまずいわよね、これ。」

ネックレス型データ保存機を見て、学生の雪洞が呟いた。  
たまたま傍にいた友人が、「それ、なあに？」と言ってぱっと取り上げてしまった。

「大事なものの、ほら返して」

「綺麗ね、これ。何かのデータ？」

友人は太陽にすかしてそれを覗き込んだ。

「危ないよ、それに触らない方がいいから、返して」

友人はきよとんとすると、くすりと笑って雪洞にデータを返した。

「また危ないことしてるんでしょう？ほどほどにしなきゃだめだよ。う。」

「うん。…ありがとう」

どういたしまして、と笑った彼女の笑顔は、一國を取り仕切る大人たちよりよっぽど輝いて見えた。

彼女の後ろで静かに舞う、桜の花びらがやけに綺麗な午後だった。

その時は、なんともない、ただの子供同士のじゃれあいだと思っていた。

その友人は次の日、不遇の事故で還らぬ人となった。

「私にもう関わらないで。」

頑なに接触を拒む雪洞に対し、周囲は必死の交渉を繰り返した。政府の弱みを握っているに等しい少女に対し、周囲は歯ぎしりをしながらもそれ以上の協力を強制できなかったのである。

そんな過去は露知らないとは言え、フランシスは誰に似たのか無闇に相手や社会の裏情報を手に入れたがる傾向がある。思い出したくない記憶と相まって、雪洞はフランシスのキヲクにもそのコードに関する一切の情報を入れなかった。

そんな思い出に浸っていたときだった。

ガシャンッ

と小さく音がすると、

ガシャガシャガシャンッ

かみ合った歯車が回り出したようにデータが開いていった。



「はい、これでいい？後はお願いね」

雪洞はにやりと笑うとタブレットをフランススに放り投げる。

「…後学のためにお聞きしますが、どのような手法を？」

「秘密よ。ひ・み・つ。」

「何故ですか」

「女はミスティアスな方が素敵じゃない。

それにあなたがそこまで知ってしまったら、私がフランススに勝てるものが何も無くなるじゃない」

雪洞は髪をかきあげて言った。

「恐れながら、お嬢様。それが真意ではありませんね。

さほどではありませんが、いつもよりぎこちないですよ」

「しつこいわね。主人が秘密といったら秘密よ。それ以上の詮索は認めないわ」

雪洞は踵を返すと、ずんずんと歩いていく。

誰に似たのかフランススは諦めなかった。

画面に付着する雪洞の指紋から行動経緯の推測を試みる。

しかし、指紋は既に綺麗に拭き取られていた。

ならば、と画面への接触による表面温度の微妙な差違から動きを読む。  
しかしそれも、画面を体に押し当て体温で均一にした雪洞によって、阻止されていた。

ちっ…俺の行動なんて開発者であるお嬢様にはお見通しということか。

フランスは悔しそうに舌打ちをすると、先ほどとは打って変わって従順になったデータを開いた。

## 荒れる簞

近隣の奥様方の予想通り、ケイマ邸にはいくつものからくりが張り巡らされたいた。

一つだけ木目の違う壁を押せば、地下への扉が現れる。

雪洞はセキュリティに虹彩を読ませて倉庫に入り、大量に積みあげられた本の一つを引いた。

ガコン、ゴゴゴゴ…という地鳴りと共に部屋が回転する。

「きをつけてね！お仕事がんばって！」と走り寄るシャナの頭をポンと叩くと

雪洞は屋敷の奥にある簞管理室の更に奥、

大きな半透明のカプセルが並ぶ手術室のように真っ白な部屋へ入って行った。

ジーッ

という音とともにドアが閉まり、赤外線が再び張り巡らされる。

同時にゆっくりと開いていくカプセル内に、雪洞はするりと体を潜りこませた。

橙色の液体 のようなものがカプセル内に満ちていく。

浮力に身を任せると

雪洞は除々に簞の中へと落ちて行った。

目をあけると、そこは戦場であった。

混乱に乗じて起こる窃盗、かろうじて残った所有物をめぐる争い、有名な権力者、セレブにスターが罵倒しあう声…  
それらが渦となって雪洞を襲う。

頭が痛い…

軽蔑と同情の眼差しを彼らに向けながら、雪洞はなるべく目立たぬように村を走り抜けた。

どうしてこうもうまくいかないんだろう

私<sup>が</sup>作りたいのはこんな世界じゃないのに。  
今すぐコイツらを消し去ってしまいたい…

そっだ、本当なら要らないんだ、箒にこんな汚いヤツらはいらないんだ

途中で「あっ」と声をあげると、雪洞は大きく体勢を崩した。  
慌てて地面についた掌にうっすらと血が滲む。

「いったあ…」

本当の体じゃ無いくせに、と思うと、今度は胸が痛んだ気がした。

もう、やめてしまいたい

雪洞は喧騒を聞きながら、手首を伝う血を眺めた。

「いつまでこうして、空を掴み続けるような真似をしていければいいの

本当に叶う日なんてくるんだろうか

雪洞はしばらく呆然と座り込んで、自分の掌を見つめていた。しかしぶるつと頭を振ると、よたよたと再び歩き始めた。

フランススは雨に濡れた体にもせず、優雅にベンチへ座って状況を眺めていた。そんな彼に歩み寄って声をかける。

「フランスス、この状況を説明して」

「見たままです」

表情を崩さずにフランススが答えた。

「どうにかしてっっていう意味よ!」

やれやれと肩をすくめ立ち上がると、フランススは

「武力介入でも?」

と首をかしげた。

「もう何だっといういわ。この胸クソ悪いやつらを黙らせて」

強張った表情の雪洞をまっすぐに見つめ、ふっと笑うと  
「お任せ下さい」と丁寧に頭を下げた。

くるりと体を反転させ、二人の近くで口論している男たちのもとへと向かっていく。

もう少し冷静になるべきだったか。

いくら彼でも、この状況は手に負えまい、一旦住民を強制退去させようか…

いや、それではまた戻ってきたときに同じことが起こる。

どうするつもりだろう、と雪洞が不安そうに見守っていると  
フランススは飄々と男たちに近づいていった。

周囲が振り返るほどの大声で争っていたのは、5・60代ほどのタ  
ーバンを巻く黒人と  
高級そうなスーツに身を包む白人の男である。

二人は近づいてくるフランススにすら気付かない勢いで口論している。

「お前の家が私の敷地に倒れてきた！だから私のものだ！」

「何をふざけたことを…！それならお前の庭の木だってなあ！」

くつつくのではないか、と思われるほど顔を近付けて睨み合う二人の頭に、すっと長い腕が伸びた。

フランススは二人の頭を掴むと、  
次の瞬間

ガンッ！！

と勢いよく互いの頭にぶつけさせた。

突然のことにさすがの雪洞も驚いて声が出ない。

一人は一国の王、もう一人は名の知れた資産家である。

「なっとなにを……」

「篝火での騒乱は禁じられております。原則通り体罰を執行させて  
頂きました」

呆然と立ち尽くす男たちに、爽やかな、しかしひどく冷たい笑みを  
向けると、

今度はその隣で物を奪いあっている老人と若者の元へ向かう。

ついに力負けしたのか、地面に倒れ込んだ老人は現れたフランス  
にすぎるように言った。

「あれは、私がようやく妻のために手に入れた首飾りなのです。そ  
れをあの若者がいきなり……」

フランススは盗んだ物を抱えて逃げようとする若者の首を掴むと、  
「篝火でも窃盗は禁じられております」

と、投げ飛ばしてしまった。

一連の事件を見ていた周囲の人々は、

始めは地獄に舞い降りた天使のごとく一人威光を放つ青年に思わず目を奪われていたが

獲物を探す鷹のようなその鋭い眼光を射すくめられると、人々は顔を見合わせて

抱えていた財産を放りだし逃げ出し始めた。

「…ふふふ、そうだ。お嬢様の作られた世界を汚す輩は掃除するのが私の務めさ。

いくらお客様でも、容赦はしない」

バキッとフランシスの拳が鳴る。

それに応えるように、いつの間にも集まったのか頭上で旋回する鳶たちがヒューッと声をあげた。



## 消防士フランス

フランスはようやく、島の周縁にある小さな村に着いた。

かつてそこは、自給自足の農業生活が営まれていた長閑な町だった。酪農と葡萄の栽培で有名なその村は、主に昔懐かしの片田舎生活を求める人々が集う場所であった。

炎を逃れてぼつねんと回り続けている真っ白な風車とそれを囲む色とりどりの可愛い家々がかつての幸せな生活を思わせる。

フランスの予測通り、村は至る所で黒い煙が上がっているものからうじて原型をとどめていた。住民も残っているようだ。

しかし先ほどと違い、混乱する人々の声、泣き声、怒鳴り声があちらこちらから聞こえてくる。

騒がしい。

フランスは不快そうに顔をしかめると、ばさりと上着を脱ぎ捨て「お嬢様、とりあえず消火するので適当に消防車か何か送ってください」と言った。

「わかったわ。はい」

頬杖について画面を眺めていた雪洞が、手元のボードに何かを打ち

込む。

すると、

「パッパァー」というけたたましいクラクションと共に、どこからか大きな消防車が数台現れた。

フランスは手慣れた動作でそのうちの一つに乗り込むと

勢いよくアクセルを踏み込んだ。

そして車ごと、逃げまどう人混みに突っ込んでいった。

「ちょっと！被害を増やしてどうするのよ」

雪洞が思わず立ち上がって苦笑する。

「失礼、久々なもので足の感覚がどうも」

その後も豪快なハンドル裁きで村中を暴走した後、ようやくお目当てと思われる火の手の強い現場に着いた。

フランスは颯爽と車から降り立つ。

突如現れた消防車を見つけ、小さな男の子がたたたと走り寄るち歎声をあげた。

「うわあ！しょうぼうしゃー！」

高額な料金の発生する簞に滞在する子供など、大方どこかの御曹司か何かである。

「これ、まーくん！」と彼の祖母らしき人物が駆けつけるが、白髪の混じるそのご婦人もどこか高貴そうな立ち振る舞いだ。

「乗る乗る！僕が乗るって言ったら乗るの！」

まーくんと呼ばれたその子供は、祖母の手を振り払うと地団太を踏んで騒ぎ始めた。

背後には炎が迫っているというのに、案外子供の方が肝が据わっているのかもしれない。

いかにも知能の低そうなお子様ですね、栄養素を脳の活性化にも当てた方がよろしいのでは

と思わず飛び出しかけた言葉を抑えて、フランシスは対女性子供向けの営業スマイルを作って振り返る。

「もう危ないから、行きましょう」

「やだやだ！ここなら何でもできるって言ったじゃん！」

ついに靴を脱いで放り投げ始めた子供を、女性がおろおろとあやし始めている。

そんな二人にゆっくりと細長い影が近づいて行った。

そして すっ と小さな運動靴が差し出される。

海外の香水のような、爽やかだけれど甘い香りが漂い、子供と婦人は顔をあげた。

「ボク、ちゃんと掃いてあげないと、靴がかわいそうだろう」

フランシスは跪くと、少年の足に丁寧に靴を履かせた。

「こらこらこらこらこら、何してんのよそこ」

と、マイクから聞こえる雪洞の苦情をぴんつと指ではじく。

一丁前にオーダーメイドの革靴か、具現化にも金がかかるだろうに

とは言わずに、

今度はうつとりと腰を抜かして見つめる老婆を向くと

「さあ、ご婦人も下がっておいで下さい」

と手を取って立ち上がらせた。

「あなた様の白い手に黒いすすがついては私の立つ瀬がございません。

せつかく顔に似合わず小奇麗になさっておりますのに。

箸では恰好だけでなく、顔もオプシヨンで変更することが可能です。

この機会に、是非いかがでしょうか？

100%イメージ通りの御顔になりますよ……」

「なんか最後の方おかしかったわよ。営業入って無かった？」

と騒ぐマイクを再度弾いて黙らせる。

終盤のたつぷり込められた無礼講にも気付く間もなく

フランススの甘美すぎる笑顔に、老婆は握っていた子供の手を離してまで

ぶんぶんぶんつと首が折れんばかりに頷いた。

フランススはニコリと笑うと

「さあシェルターへ」と二人を促す。

魔法にかけられたようにふらふらと遠ざかっていく二人の背中を見送りながら

フランススは段々とサディステイックな顔に戻る。

元通りに眉と目尻をあげると、炎に向き直って言った。

「お嬢様、空気をお読みになって下さい。」

「こつこつ一つ一つ地道な宣伝活動の積み重ねこそが企業の生き残る道なのです」

「地道というよりちゃっかり一番高額なオプション売りつけてるじゃない」

そんな会話をしながら、フランシスは消防車のトランクを開けた。そして決して軽くないだろう大きなホースを両手に抱え直すと、燃え盛る炎に向けて勢いよく水を噴射し始めた。

並ぶ数台の消防車からも次々に水が噴射される。

「おおっ

ざああっ…

がやがやがや…

いつの間にか遠巻きに人だかりができていた。

突如現れた美しい消防士に、拍手が起こる。

フランシスは振り返ると観衆に向かって愛想よく微笑みかけた。くらくらつと女性たちが倒れる。

貧血だ。

「被害者を増やすなー」

雪洞がメガホンを持って抗議する。

「不可抗力です」

5分、10分と消火活動が続く。  
しかし一向に炎が収まる気配は無かった。

「おかしいですね」

フランシスは顔をしかめると、どさつとホースを投げ捨てた。  
そしてパンパンツと手を払うと

「すみません、お嬢様。やはり面倒なので、土砂降りの雨でもふら  
していただけませんか？」  
と不機嫌そうに空に呼びかけた。

「あーあ。もうわかったわ。『神の見えざる手』つと」

もはや自然な方法では事を進められないと観念した雪洞は、EMERGENCYと書かれたボタンを押した。  
突如黒い雲があたり立ち込めると、スコールのような土砂降りの  
雨が降り始める。

次第に赤い炎は灰色の煙へと変わっていった。

「あーあ。最初からこうすればよかった」

営業用とは分かっているけど、自分以外に美しすぎる笑顔を振りまく  
フランシスを思い出し  
ムカムカイライラしてくる。

ガンツと拳でボタンを叩きつけると

フランススの頭上から落ちる大粒の雨が勢いを増した。

少しきよとんと空を見上げてから、

「もう大丈夫です、完全に火は消えたことを確認しました。いらして下さい、お嬢様」

と、満足げな笑顔で呼びかけた。

ずぶぬれな体などお構いなしに、珍しく心から嬉しそうな顔だった。

そんな笑顔を見ていたら何も言えなくなるだろコノヤロウ。

恨めしげに画面を見ていた雪洞であったが

「もう、しかたないなあ」

と言うとしぶしぶ立ち上がり、壁にかけてあったコートに袖を通した。

「しょうがない、行ってやるか」

## チョコレートドリンク×屋根の上で

そんな主人の姿を見ていたフランシスは、突如「失礼」と言って顔を近づけると

雪洞の額に手を当て出した。

ピピッ

と電子音が鳴る。

雪洞が黙っていると、

「心身の疲労により血中糖度が下がっております。

免疫力が落ちて風邪をひかれる前に、こちらを」

と言って車内のボードからチョコレートドリンクを取り出した。

雪洞は何も言わずにそれを受け取り、ぱくりと口に含む。

少し苦味のある甘さが、ふわりと口の中に広がっていった。

\*\*\*\*\*

雪洞はかろうじて焼け残った廃屋の屋根に座り、地上の喧騒を眺めていた。

「はは…」



さすがフランスだ。

彼はいつも、人間の予想のはるか先にあることをやってくれる。

それに何度救われたことだろうか、と雪洞はもう一度、はは、と笑った。

そして、何故だか体が軽くなった気がした。

そうか、篝は精神世界だから、心が暗くなると体も重くなるのねなるほど、と思った拍子に、頬を涙が伝った。

「えっ」

と歪む視界に驚いて、慌ててそれを拭う。

「たまにはロボットも単純でいいかもしれないわね。いつそ私もなっちゃんおつかしら」

なんて馬鹿ね、と雪洞は笑った。

「んー、さて、この後どうしよう」

思いきり背を伸ばしてよしと気合を入れると、雪洞は高速で思考を回し始めた。

「まずはサウスエリアの再建ね、頑張って一から耕してもらわなく

ちや。

『大災害からよみがえった不死鳥の街』、なんてフレーズをつけとけば

住民は単純だから大丈夫でしょう。

あとは自治会長の演説次第だわ、あの成金、頭は良いけど相応の報酬を出さなきゃ動かないから交渉が必要ね。

賠償金も仕方ないからだそうかしら。

なるべく他の都市に情報を公開させよう、おそらく公共セクターと民間セクターの連携が要になるわね。

時系列に合わせて強度を変えた連携方法を提案しなきゃ。

それから…」

篝に入る際、人々は同意書に押印が求められる。

『篝内で生じる一切の事に、弊社は責任を持ちません。

万が一外部世界、日常生活へ何らかの影響が出た場合も、ご自身による対処をお願いします。

また弊社では万全の安全体制を整えておりますが、篝内における財産所有権の強制的譲渡、理不尽と思われる剥奪行為、疑似自然災害の発生も事前にご理解の上…』

別世界には連れてってやるが、あくまで自己責任。

何があっても文句は言うな、というのが原則である。

しかし理屈と感情は往々にして異なる。

高額な慰謝料や雪洞の失脚を求めて訴訟を起こす者も、実のところ今回ばかりではなかった。

それでも大抵が事なきを得てきたのは、彼らにとって最も恐ろしいのはが篝の利用停止であるからだ。

『篝とは新しいドラッグだ』

以前どこかの社会評論家が、巻き起こる篝現象を批判して言った。

相応のコストさえ払えば、篝内では顔も体も自由に変えて生きることができる。

すなわち、それまでのしがらみや鬱憤から解放された新たな生活を新たな議事世界で試行的に営むことができるのである。

加えて町や物質も、現実のそれより遥かに美しく、便利なものが多い。

それはそうだ、本物では無いのだから

そのため、その高額な料金から利用者層はまだ一部の富裕層に限られてはいるもの

一度その解放感を味わった者は、もう篝無しには成り立たない生活になるのだった。

しかし現在の篝は、掲げられている崇高なユートピア構想とは裏腹に人間の欲望の吐き場と化してしまっていた。

「やっぱりそんな簡単じゃないわよね」

雪洞はぼつりと言葉を零した。

「それでも…」

今更やめるわけにはいかない。

ようやくここまで来たのだから。

私は必ず、貴方の望んだ『篝』を完成させてみせるわ。

そしてもう一度、貴方とそこで笑い合うの。

そんな頼りない希望だけが、今の私を支えているんだから。

追いかけるフランス お約束展開

「この、馬鹿野郎!!」

ガスツ と、雪洞のアップーがフランスのみぞおちにクリーンヒットした。

「がはっ!!」

差し出したむなしく右手が宙を切り、フランスが膝をつく。今度こそ本当の不意打ちであった。

さすがは設計者だけあって急所を心得ている。

「お、お嬢様…何を…」

このアマ…とはさすがに言わなかったが心底怨めしそくにフランスが雪洞を見あげる。

と、突如目の前が暗くなった。

驚きのあまり一瞬息が詰まる。

フランスは思わず、体を強張らせた。

状況を理解するのに数秒を要した。

そして雪洞が、自分を抱き締めたのだと気付いた。

「…？」

暗闇の中、フランシスは懸命に目を瞬かせる。

「お、お嬢様？」

突然の不可解すぎる主人の行動に、頭が混乱する。

「勝手なことしないでって、言ってるでしょ！」

すっかり硬直したフランシスを更にきつく抱きしめると、雪洞は声を震わせた。

「あんたまでいなくなったら、どうしたらいいの！」

二度も、二度も失うなんて嫌だ！」

に、二度？

フランシスの鼓動が、波打って行く。

「あんたの行動なんてお見通しだったから、きつと無理にでも私を止めるだろうことは分かった。」

だから、私が気絶したらロボットが作動するように、咄嗟に仕掛けておいたの。

…おかしいよね。

あなたが倒れたとき、心臓が止まるかと思った。

それなのに、飛び出すこともせずに  
陰からただ眺めてたのよ…」

くぐもった声で、雪洞は悲しそうに笑う。

体の痛みもどこかへ飛んでしまうほどに、フランスはただただ錯綜する思考回路に戸惑っていた。

お嬢様は、私を今確かに殴った。

殴るとは、即ち怒りの感情の現れ。

しかしその次にお嬢様は私を抱きしめている。

このように他人と肌を触れさせるのは、大抵その原因となるのは同情、感動、愛情…

どつどつどつ…と心拍数が上がっていくのを感じる。

1 2 1 . 1 2 2 . .

「それでも…」

雪洞の腕に力がこもるのが分かった。

「それでも私がいなくなったら、あの人はどうなるの？」

もしかしたら、まだどこかで私を待ってるかもしれない、  
今、簀を捨てて行くことはできない。

そう思うと、死ぬこともできないの!!」

もはや嗚咽に近い声で、雪洞が叫ぶ。

「繰り返したく無いって言うてるのに、

いざとなったら、あんたより簀を優先じかけた自分が、怖い…!!」

じわっと、肩が温かくなるのを感じる。

まさか



これは一般に言う「涙」…？

フランススの人工知能はもはや稼働速度の限界に達していた。

言葉が頭の中でぐるぐる渦を巻く。

涙、その原料は血液。9割以上が水で出来ており、タンパク質、リン酸塩なども含有。  
涙腺内の毛細血管から得た血液から血球を除き、液体成分のみを取り出したもの…

違う、この場合は

その主要な役割は眼球の保護が主要な役割であるが

ヒト特有の現象として、分泌は感情の発現として分泌される

感情

何故？

「何故謝られるのですか？  
あなたは一経営者として、最も合理的で正しい判断をなされたので  
すよ」

その言葉を聞いて、雪洞は肩を震わせて泣き始めた。

ごめん、というと、フランススを抱く力が強くなる。

悪化した。

何故だ

もはや何も分からぬ…

どこをどう仮定しても辻褄が会わなすぎる恐らく一種の精神攪乱だ  
そう思おう

始めてここまで取り乱した主人を見たことも、無自覚のうちに混乱を助長したのだろう。

フランススは、よく分からずとも  
ただ 自分の行動が何かしら彼女の言動に負の感情を負わせた、と  
いうことだけは理解した。

泣きじゃくる雪洞をそつと離すと、フランススは手袋を取って伝う  
涙を拭った。

「申し訳ありません。

…」のような場合、

執事とはどのように行動すれば…」

訳が解らないまま、フランシスは今度は自分から雪洞をギュッとだきしめた。

いつか感情の勉強のために見た映画で俳優が泣く女優を見てこうしていたのを思い出したのだった。

あの時は、こんなものを覚えてなんの役に立つのだろうと思っただ  
たが  
やはり学習しておいてよかった。

「人間」とは、複雑だ…

そしてフランシスは

雪洞を抱いたまま覆い被さるように

バサリと倒れた。

一瞬何が起こったのか理解できなかった。  
スローモーションで周りの景色が反転していく。

ガッン！

「いつ！」

押し倒された拍子に、思い切り頭をぶつけた。

自分よりはるかに大きな体を受け止めながら  
目の前が真っ白になる。

一瞬時が止まったのかと思われた。

しかし、カチャン、雪洞の携帯が地に落ちる音がして

それがわずか一秒足らずの時間であったことを知る。

雪洞は一気に我に返った。

そしてしばしの沈黙のあと、

今しがた自分が柄にも無く酷く泣き喚いたことを思い出すと  
ぐあああつと

凄まじい恥ずかしさが腹から頭の天辺へと急激にこみ上げる。

やってしまった!!!

「フランスス、もう大丈夫だからどいてよ!」

すっかり頬を赤らめると、真っ白な天井に向かって叫ぶ。

慌てて体を動かすが、フランススの重みで動けない。

今度は自分の心拍数が尋常で無いほど上がっていくのを感じながら、雪洞は目を瞬かせた。

「フランス…」

フランス？」

反応は無い。

フランスの背中を優しく叩く。  
しかしその体は、ぴくりとも動かなかった。

「あの…ちょっと？」

…

はっとして慌てて耳をそばだてると  
かすかな規則正しい寝息が聞こえてきた。

生きてる…。

雪洞は、ほっとため息をついた。

さすがに、意識失ったのね。

まあ無理もないわ、頑張ったわね。

お疲れさま。 ゆっくり休みなさい。

よいしょとフランスの体をどかして起き上がると  
その綺麗な横顔を眺めた。

薬を使っても意識を失うなんて

本当に、最後の力でここまで私を追って来たのね…

## 障害物競争@からくり屋敷

広々とした廊下は、そこが地下であることすら忘れさせるほどの広さを有していた。

所々に飾られる絵画が、人の気配で発火するロウソクの明かりでゆらりと揺れている。

フランシスは雪洞のかすかな残り香を追って一人ケイマ家の地下廊を走っていた。

壁に欠けられた花瓶の絵に触れると、くるりと壁が回転する。

「こつちか！」

ギイ…と開かれた暗い道に入ると、そこは行き止まりであった。

カチャリ

と頭上でかすかな物音がする。

はつと上を見上げると、巨大な剣山がフランシス目掛けて落ちてきたではないか。

「うわっ！」

ガシャーン！

と鋭利な金属が地面にぶつかるすれすれで、フランシスは壁をぶち

抜き慌てて部屋を抜け出した。

「くそ……」

額の汗を拭って辺りを見渡す。

「全く、どんな道を行かれたのかお嬢様は……。この機会に俺を殺そうとしてるんじゃないだろうな」

地下の簞管理室から客間のある地上2Fまで続く道は、本来であれば階段一本である。

しかし誰が考案したのか、東洋の古典的防犯装置からくりが張り巡らされているケイマ邸は、主人しか知らぬような秘密の通路がいくつもあった。

一刻も速くシャナのもとへ駆けつけたい、そう考えているのだろう雪洞は

あらゆる非公式な通路を組み合わせ、割り出された最短距離を走っているのであった。

さすがのフランチスも、1000は超えるだろう道順から雪洞に追い付くには少々時間を要していた。

――緊急時にボディガードでもある俺を引き離してどうする、馬鹿なのかあの方は

焦りともどかしさから苛立ちが込み上げる。

しかし、ふと薄暗い経路を小さな体で懸命に走っている少女の姿を



思い浮べた。

ひよひよいと障害物を避ける姿はまるで床下を走り回る白鼠のようだ。

そう思うと、人知れず笑みが溢れた。

「…世話のかかる主人だ！」

フランシスは再び走り出した。

「…こんなときだけ何故こうも速く走れるのか

これが、よく物語の主人公が家族や仲間を助けるときに能力以上の力を出すという、ヒトの”特別な力”か。

フランシスにはこの世界でまだまだ理解できぬ事柄が多くあった。

特に論理では説明できない、”感情”というもの。

時折見せる、屋敷の者への雪洞の異常なまでの執着などは、フランシスには甚だ不可解だった。

「それにしても…」

ふと立ち止まって、フランシスは耳をそばだたせた。

「…何かがおかしい

現実世界に戻ったときから、屋敷の異変を感じていた。

まるで何か、目に見えない細い糸が屋敷中に張り巡らされているように、ピン、と空気が揺れている。

通常の間では感知できないだろうくらいの、ごく微かな高音の電子音が鳴り止まない。

――何かを仕掛けているのか、ユリシス

かすかな悪寒が背筋をなぞる。

フランシスは速度を上げ、現れた階段をかけのぼった。

しかし――

着いた部屋はまたしても行き止まりであった。

「だぁあっ、くそ!」

フランシスは心底悔しそうな唸り声をあげると、急いで来た道を引き返して行った。

## どこが良かったのか

最後の台詞はアリエルの作り話だろう、とフランスは大して気に止めなかったが  
代わりに他の大きな疑問が、残ったことを覚えている。

——一体シンレイとやらはお嬢様の何が良かったのか。

童顔に洗濯板で美人でもない。運動神経が悪いのはまあ可愛げがあっても、一番の問題は気が強すぎることだ。

「少しは猫を被ることも必要です。社会では必然的に優位にたつ男性に取り入ることも常套手段なのです。ただでさえ頭が良すぎて男性から引かれる一方ですのに…もう少しの周囲の男性に頼られる素振りを見せられてはいかがですか」

と提言すると、お嬢様は決まって

「頼れって誰に!?!どいつもこいつも使えないダメ男じゃないの! 仮に仕事を任せても、非効率的で膨大な時間がかかるのがオチよ。

イライラするわ!」

とおっしゃる。

確かにその見解は間違っではないのだが…

あの方はご自身の子孫繁栄をどのように考えていらっしやるのか。せつかく物好きな、いや心優しいお嬢様を想う人が現れたというのに…

もったいない。

## イライラフランスVSゆりたん

ー ー ー だいたい無礼なのはどっちだ。

肉親でも顧客でもないお前など、床に伏したお嬢様が体を引きずつてまで会いに行く相手ではないだろう

見た目はどうであれ、お嬢様はお前のところの我が儘娘の子会社とは格の違う、大企業の社長なのだ

それなのに黙って聞いていればまともな敬語も使えてはいない上下関係のいろはも知らぬようだなこの若造は

「ですから、私は、貴方ではなく、貴方の主人に直接用事があるのであって、貴方には用はないのですよ」

あからさまに侮辱的な口調である。

「雪洞・F・ケイマ様をお呼びください」

このガキが…！

ー ー ー 一から礼儀を叩き込んでやろうか、とフランスが顔をひきつらせた時だった。

ユリシスはゆっくりと、安らかに寝ているシャナの頭を撫でた。

1  
2  
3  
4  
5  
6  
7  
8  
9  
10  
11  
12  
13  
14  
15  
16  
17  
18  
19  
20  
21  
22  
23  
24  
25  
26  
27  
28  
29  
30  
31  
32  
33  
34  
35  
36  
37  
38  
39  
40  
41  
42  
43  
44  
45  
46  
47  
48  
49  
50  
51  
52  
53  
54  
55  
56  
57  
58  
59  
60  
61  
62  
63  
64  
65  
66  
67  
68  
69  
70  
71  
72  
73  
74  
75  
76  
77  
78  
79  
80  
81  
82  
83  
84  
85  
86  
87  
88  
89  
90  
91  
92  
93  
94  
95  
96  
97  
98  
99  
100

## 鳥居×モダンアート×ホットミルク

鳥居とは神を祭る聖域と人間の俗界を区画するものとして  
東方の日本という国で用いられてきた、と雪洞は言っていた。

なるほど、さすがは神域への入口を示す「門」をモチーフにしてい  
るだけはある。

そこを潜ってから妙に胸がすつとする感覚をフランススは覚えた。

- - まあ、どうせ精神がネットワークに落ち着いたということだけ  
なんだろうけれど

21世紀から数世紀たった25世紀でも、中世以前の印象派や写実  
主義は

更に過去のものへと追いやられる傾向にあり

変わりに21世紀のモダンアートの流れをそのままに

衰退の兆しを見せる一歩手前、つまりは最盛期を迎えていた。

芸術とは心情の発露であるとも言えるが、生憎それが他人の感覚と  
共鳴できないことも多い。

特に精神世界の簞では、そのずれが顕著に感じられるのだろう。

「お嬢様」

「何?」

雪洞の道を作るため前を歩いてきたフランススが、首だけ振り返って言った。

「お疲れのようですね、久々の簞は御体に合いませんよう。神経沈静作用のあるホットミルクでも御持ちしましょうか」

「…いい。この状況でどうやって。…ああ、あなたならやりかねないのよね」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5225y/>

---

置き場所。

2011年11月20日18時49分発行